
どないやねんッ！！

滾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どないやねんッ！！

【Nコード】

N5016B

【作者名】

滾

【あらすじ】

ソイツは突然やってきた。隣に、「彼女」という核爆弾を引き連れて・・・。

前編 ソイツと彼女（前書き）

これは実話を元にしたフィクションです。

前編 ソイツと彼女

俺は家に居た。

普通に自分の部屋でくつろいでいた。いつもと同じだ。友達とメールをしつつ、ゲームをして。

ふと時計を見ると、もう6時を回っている。この季節に6時ともなると、外はもう暗みを帯びて、太陽は山に半分以上隠れようとしている。

いつもと変わらぬ生活を、いつもと同じように過ごしている。それだけだった。が、

ピンポン

チャイムが鳴った。

だれか客でも来たんだろう。もしくは郵便か。

しかし俺の予想を反して内線が鳴り、

「友達が来たよ」

と、母がそう告げた。

友達。

誰だろう？

思い当たる顔を何人か思い浮かべて、俺は玄関を出た。が、

「よう、滾」

「は？」

思わず素っ頓狂な声を出してしまった。

玄関の外に居たのは、俺が頭に思い浮かべていた友達の誰でもなく、

確か中学の時に同じクラスだった、俺の家に二回程度来た事のある、知り合い以上友達未満な奴だった。

何で今更俺の家に？

中学を卒業して以来、コイツとは会った事も無かったし、どこの学校に進学したのかも全く知らない。

そんな俺の軽い混乱を他所に、ソイツの顔は晴れ晴れとしている。中学のときより幾分か雰囲気が変わっている気もした。

「どうしたんだ？」

そう尋ねずには居られなかった。

が、ソイツの反応は曖昧で、

「いや、別に」

としか答えない。

不振に思いつつも、ふと、俺はここで気付いた。

否、^{いや}本当の事を言えばさつきから気付いていたのだが、嫌な予感がして敢えて見ないようにしていたのだ。

偶然そこに立っているだけ、と、無理に自分に信じ込ませようとしていた。

女性。

ソイツから一步下がった辺りに、女性が立っているのだ。

ああ、嫌な予感がする。

「あゝ・・・、その人・・・は？」

誰？と、俺は恐る恐る尋ねた。

その瞬間、ソイツの顔が全力で綻んだ事を、俺は決して見逃したりしなかった。

ソイツは全力で綻ばせた顔で、言った。

「ああ、コイツ？彼女彼女」

ナ、ナンダッテ！！！？？

思わず口に出そうになった「嘘！？」を必死で押さえ込んで、俺は

懇親の作り笑いをして見せた。

「ああ、そうなんだ」

言いながら、H A H A H A。と、白い歯を見せて笑ってみせる。はつきり言って、この衝撃たるや並ではない。

いや、友達に彼女が出来たから驚いているわけではない。

彼女がいる友達なんて腐るほどいるし、実際友達が彼女を連れて遊びに来たこともある。

俺は“ソイツ”が彼女を連れてきた事に驚いているのだ。

『可も無く不可も無く』、という言葉があるが、あの言葉どおり、コイツは不可では無いにしろ、確実に『可』では無いのだ。

だったらお前はどんなんだ。と言われたら俺だってそうかもしれないが、まあとにかく、「彼女が出来た」という事に驚かざるを得ないような奴だ、という事である。

「まあ、何だ、用があつてきたんだろ？入れよ」

と、俺は石のように硬く握った拳をポケットに潜ませて、ソイツとソイツ彼女を家に上げた。

因みに、俺がさっきからソイツを“ソイツ”としか表記しないのは、結局最後まで“ソイツ”の名前を思い出せなかったからだ。

俺とソイツの関係が、如何に細い糸程度でしかつながっていないなかったかがよく解る。

閑話休題

ともかく、用があるから来たのだろう。それには違いないはず。

俺は二人を自分の部屋に招き、ソイツの彼女を椅子に、俺はベッドに、そして“ソイツ”をダンベルやらベンチやらが散乱している床に座らせた。

「で？」

何しに来た？という意味合いを込めて、俺はソイツを見た。が、

「お前こんなの持ってたんだ？」

何故かスルーされ、ソイツは床に置いてあったダンベルを手にとった。

「・・・ああ、最近鍛えててよ」

偶然視線が離れたただけだろうか？それとも意図的に視線を外されたのだろうか？

解らないが、ソイツは一向に何しに来たのかを言おうとしない。

それどころか、何をしに来たのかすら見当もつかない。

それに関して、実際のところ俺は別に構わない。久しぶりの友達（？）に会えて、まあそこそこ嬉しかったりするし。

が、ソイツの彼女に関してはそうは行かないだろう。

どっちかというと、あまり初対面の人とは話が出来ないタイプのようで、かなり気まずそうに椅子に座っている。

このまま長時間なにもしないわけにはいかない。

「なあ、お前何しに——」

「あ、悪い、ちよつとトイレ借りていい？」

「——来・・・、あ？トイレ？ああ、いいよ」

ソイツは俺の話を断ち切って、足早にトイレに向かった。どうも怪しい。

俺はアイツの拳動に不振を感じながら、はて、と顔を上げた。

アイツの彼女が椅子に座って、気まずそうな顔をしている。

そういえば、俺もめっちゃ気まずい。

何で友達（？）の彼女と二人っきりでアイツを待たねばならんだ。そもそも、俺はゲームの途中だったんだ。

ゲームはつけっぱだし、メールもしてた途中だし。

テレビ見れば、ゲームはポーズ中で、画面にゲームのマップが前面に出てるし、あ、気付けば携帯ピカピカ光ってんじゃん！メール来てるジャン！

それら全てを何とかしたいのだが、いかんせん、その両方を彼女が座っている椅子に邪魔されてしまっている。

あまりの気まずさに俺も席を立とう、とした次の瞬間！

「あ、あの・・・」

彼女が口を開いた。

「はい？」と俺。

「すみません……。ほんと……。急に来ちゃって……」
申し訳なさそうに、彼女は俺に頭を下げた。

「あ、いや、別にいいんですけどね」

俺は半分立ちそうになった腰を再びベッドに下ろし、まだ続く彼女の話に耳を傾けた。

「あの、ほんと、迷惑じゃないですか？」

「いや、別に迷惑ってわけじゃないです」

俺は首を横に振った。

何でも気にしてるのだろう？そんな事をふと思ったとき、彼女の口からとんでもない一言が！！

「けど、今まで行った家の人も、ずっと迷惑そうで……」

ん？何？

『今まで行った家の人』？

「え？何？どういう事？今まで行った家の、……。って？」
もの凄い気になる。

と、彼女が言い辛そうに口を開いて、

「あの人、学校が終わってからずっと知り合いの家回って、彼女が出来たこと……。私の事見せて回ってるんです……」

爆弾級！！

痛ッ！痛たたたたッ！！

痛すぎる！

ここまでくると、爆弾もC4並の威力だ！

アヤツめ！とうとうそこまで落ちぶれたか！！

「今日、もうここで5件目なんです」

「そんなにカッ!!」

「C4から核爆に格上げ決定！」

「すでに5人もの被害者が!？」

「なんてこった!!俺の前に五人もの『彼女見せつけ』という暴行を働かれた被害者が居たとはッ!!一人ぐらい死んでてもおかしくないぞオイ！」

俺の反応を見てだろう。彼女の申し訳なさ加減が顔に出ている。

「ほんと、迷惑ならもう帰りま——」

ガチャ

「悪い悪い、長くなっちゃって」

彼女の言葉を遮って、ソイツが戻ってきた。

その瞬間、彼女は口を閉ざして俯いてしまう。

俺は時計を見た。

もう6時を結構回って、外はほぼ真っ暗だ。

彼女を帰すなら今が好機。

「なあ、彼女どこ住んでんだ？」

俺はソイツにそれとなく聞いた。

「あ?。。。だよ」

ソイツが口にしたのは、俺の家の方から電車で30分程度は掛かる場所だった。

今から駅に向かって、そこから乗っていったとしてもつくのは7時過ぎ。下手した8時に近い。その頃にはもう真っ暗だ。

しかしそこまでコイツはついていけないだろう。家こっちだし。

「なあ、もう帰ったほうが良いって。もう暗いし、彼女駅まで送ってやれよ」

親切心で言った俺。が、今度はソイツの口からとんでもない一言が!

「ああ、でも、これから渡辺の家に行かなきゃいけないんだ」

まだ行くのかよッ！もういいだろッ！
そうまでして見せ付けるものでもねえぞッ！

ソイツという暴走機関車は走り続けて、どんどん日は沈んでいった。

前編 ソイツと彼女（後書き）

これは実話を元に作ってある話です。

実話9に対してフィクション1程の割合で構成されています。ほぼ実話です。違うのは出てくる少人数の名前くらいです。ともあれ、楽しんで頂ければ幸いです。

後編 堪忍袋

「この後渡辺の家にも行かなきゃいけないんだ」

ソイツはそう言って再び床に座った。

ってか行くなら行けよ。何で座ってんだ。

口にさえ出さなかったものの、俺の顔は相当「帰れよ」の顔をしていたと思う。

が、その表情の変化に気付くようなら苦労はしない。

ソイツは何を思ったか、俺に床に座るように言った。

ぽんぽん、と床を叩いて、「早くすわれよ」と言う。

彼女さえ居なけりや座ってるコイツの顔面を蹴っ飛ばして見事に散らせてやるのだが、そうは出来ない。

「何だよ？」

足をソイツに向けて跳ね上げそうになる衝動を押さえ込んで、ソイツの言う通りに床に座る。

「何だ？」

若干口調も不機嫌味を帯びてきている。

が、ソイツはその事にも気付く事無く、あっけらかんこう言った。

「腕相撲しようぜ」

はアアんツ？

もう、一体何を言ってるんだろう？

もうここまで来たら名言だ。格言と言ってもいい。

『腕相撲しようぜ』『コイツ語録』の第一項に指定だ。

「俺も最近体鍛えててさ。部活もやってるし、強いと思うぞ？」

言いながら、床に腕を立てて「来い来い」と指をクイクイ動かす。

何か無性にむかつく。何で俺が自分の家で、部屋で、コイツの言うとおりにせにやなんのだ。

・・・いや、まあ彼女の前でカッコイイところを見せたいのだろう。
OK。それならお望みどおりに。

俺も床に腕を立てて、ガツチリとソイツと手を握り合う。

「じゃあ、いつせーの、でスタートな」

ああ、いつでもどうぞコラ。

口に出すことすら忘れるほど憤りがわきあがってくる。

『いつせーの・・・』

二人で声を合わせ、

『セッ！！』

筋力爆発！！

「ドラアッ！」

ガッンッ

「痛いッ！」

ソイツの腕を思いつきり押し負かしてやった。

その拍子に、ソイツは手の甲を床に置いてあつたダンベルにぶつけて騒いでいる。

ああ、しまった。アイツに花を持たせてやるんだった。心の底から忘れてた。

まあ、いい。全然いい。

「ほら、もういいだろ？そろそろ・・・」

「じゃあ腕立て伏せで勝負だ！」

「あああッ！？」

俺の言葉を遮って、コイツは何を言ってるんだ？

もうだめだ。そりゃ口にも出るわ。「あああッ！？」って。

さすがの仏様も、コイツを相手取ったなら三度目を待たずして「お前死ね。四回死ね」と神仏らしからぬ言葉を浴びせるに違いない。

だからここまで我慢した俺は凄い。自分で自分を褒めてあげたいです！！

もう何かどうでもいいや。そこまでして彼女の前でカッコイイ姿を見せたいかね・・・。

確かに解らなくは無いが・・・。

けど生憎、俺も女の前で負けて見せるほど優しくは無い。友達よりも自分優先。当然だ。

「解った。やろう」

「よし。じゃあ先に十回やったほうの勝ちな」

回数少なえなあオイ。と思いはしたが、

「OK。じゃあとつとやろう」

床に這い蹲るような形になって、腕立ての体勢に入る。

アイツの彼女の前でこんな格好をするのはハッキリ言って恥ずかしいが、まあ、コイツを負かすためだ。

「じゃあ、さつきと同じようにいっせのー、でスタートな」

「解った」

頷いて、

『いっせーの・・・』

『セツ!!』

「ふをおおおおおおッ!」

再び筋力爆発!

過去最速。もしかしたら5秒かかってないかもしれないそんな速度でフィニッシュ!!

もちろんソイツよりも早く終えてやった。

「よしッ!じゃあとつとと帰れ。もういいだろ」

立ち上がって、腕をぐるぐる回す。

「・・・ああ、もういいよ。帰るわ」

ソイツも立ち上がって、次いで彼女も椅子から腰を上げる。

「じゃあな。また来るよ」

言いながら、鞆やら何やらを持って扉に手をかける。

「ああ、四年後あたりに来いよ。その時は多分歓迎してやる」

「なんだそりゃ」

ははは、と笑いながら、それじゃあ、とソイツは部屋を出た。出際、彼女が俺にペコリと頭を下げた。

俺は笑顔で手を振った。

本当なら外まで送るのだが、もうそんな気にはなれない。
ゲームつけっぱなし。メール来てるし。

時計を見る。もう7時だ。

ああ、結局1時間近くいやがったんだな、アイツ。

まあ、いいか。帰ったし。さて、とつとゲームの続きをば――

ピンポン

――ああ？

再び嫌な予感がする。なんなら、さっきアイツが来たときと同じ、
いや、それ以上の嫌な予感だ。

もはやこれは直感だ。

俺はその直感に突き動かされて、自分自らインターフォンを取った。

「・・・はい」

受話器に向けて声を発する。

そして、

『あ、滾？俺俺』

ソイツ、再び！！

「何だよ？何だよ？」

混乱で同じことを二回言ってしまう。

インターフォンの向こうで、アイツはこういった。

『ゴメン、彼女が携帯忘れたらしくてさ』

携帯？

そんなものあるか？

俺は一応周りを見回してみたが、そんなものは無い。

「いや、俺の部屋には無いけど？」

『そんなハズ無いつて！お前の部屋に行く前まではあったんだから
！』

だからってなあ・・・。

俺は受話器を置いて、部屋の中を探した。

とはいえ、アイツの彼女は椅子に座ってほぼ微動だにしていなかった。

椅子の上にはないのなら、俺には当てすらない。

「いや、悪い。無いよ」

俺は受話器を取っていった。

すると受話器の向こうから、

『あ、悪い。あつた』

んだ！ゴラボケタコナスがあッ！

思わず受話器をぶん投げそうになるのを必死で止めて、

「ああ、そうかあつたか。よかったなH A H A H A」

決して向こうには見えないが、白い歯を見せて笑ってやった。

ああ、もういい。

どっちみち、コイツはもう帰るんだ。腹を立てることも無い。

『じゃあな』

「じゃあな」

インターフォン越しで別れを済ませて、ふう、と俺は一息ついて椅子に座った。

座って、考える。

何だかんだで、結局アイツは渡辺の家に行くのだろうか。

行くのなら、彼女の帰りは本当に遅くなる。

駅まではアイツに遅らせるとしても、そこからは彼女一人だ。

暗がりの中を女性一人歩くのはかなり危ない。

アイツはどうなろうと知ったこっちゃ無いが、彼女がどうかなるのはだめだろう。

まあ、何だかんだ、アイツが悲しむのもそれはそれで・・・。

今からでは略手遅れだが、それでも早く帰るに越したことはないか。そう考えて、俺は携帯を取り出した。

名前のフォルダから、『渡辺』の文字を探し出す。

そして、

トゥルルルルル・・・ トゥルルルルル・・・

電話をかけた。そんなに待つことなく、渡辺は電話にでた。

『もしもし?』

「あ、渡辺、久しぶり。あのさ、多分もうすぐお前の家に客くるけど、居留守使えよ。説明すんの面倒だから、詳しくは話さないけど、いいな?」

それだけ言って切った。

これで大丈夫だ。渡辺の家でくつろいで遅くなることは無いだろう。一安心して、俺はゲームに意識を向けた。

ブルルルル・・・ プルルルル・・・

電話が鳴ったのは、俺がゲームを始めて五分ほどしてからだ。

俺は携帯を取り、ディスプレイを見る。

ディスプレイには、『渡辺』の文字。

何だ・・・?

俺は電話に出た。

『もしもし?』

「ああ、もしもし?何?アイツ来ただろ?あいつ。名前忘れたけど、中学の時の」

『え?ああ、来たんだけど・・・』

渡辺の語調は何故か重い。

「何?」

よく耳を澄ませしてみる。

すると渡辺の喋る向こうから、聞きなれた、というか、さっきまで俺の部屋で聞いていた声が聞こえてくる。

「・・・おい、もしかして、アイツ居る・・・?」

少し、堪忍袋の緒に亀裂が入った。

『来ちゃった・・・』

小さい声で、アイツに聞こえないように渡辺が言う。
緒が、切れた。プツンと。

「来ちゃったじゃねえよッ！ソイツの彼女。。の方だぞ家ボケッ！
代われ！アイツに代われッ！」

驚いて母親が部屋に来るほど大きい声で怒鳴った。
暫くしてアイツが電話に出た。

『もしもし？』

「もしもしじゃねえよッ！何してんだテメエはッ！彼女いつ帰んだ
よ！テメエ彼氏なら彼氏らしく彼女の事少しは考えて行動しろよタ
コッ！」

『え？あ、ちょ・・・、なに怒ってんの・・・？』

「ああッ！？テメエがアホみてえなことしてるから——」
今までにない勢いで切れた俺に、アイツは言った。

『彼女、今日俺の家泊まるよ？』

「どないやねんッ！！！」

後編 堪忍袋（後書き）

人間精神が究極状態になると勝手に言葉が出ちゃうものです。本当に無意識のうちに「どないやねんッ!」「って叫んでました。勿論その後は平謝りです。

まあトモアレ、皆さんも早とちりにはお気をつけ下さい。
楽しんでいただけていれば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5016b/>

どないやねんッ！！

2010年11月5日06時50分発行